山西最初の女子学堂

―常氏知恥女子学堂を中心に

劉　存　軍

The First Girls' School in Shanxi: Changshi Shaming Girls' School

LIU Cunjun

Abstract

With the acceptance of Western civilization in China in the modern era, the education of girls in China began to change gradually. After the Opium Wars, churches in various places established missionary schools to propagate Christianity to the local people. This provided a place for women to learn, even when they were previously not entitled to an education. Later, women's studies were founded by local gentry, not by the church. In addition, the establishment of the legal status of women's education in the school system led to the initial development of women's education in the Shanxi region.

During this period, merchants in the Shanxi region advocated women's studies and encouraged the establishment of girls' schools to provide new education. The most famous girls' primary school in Shanxi Province is Zhisheng girls' primary school, founded by the Changshi family. Which can be said to be the beginning of the development of modern Shanxi women's studies.

Keywords：教会女学、女子学堂、常氏一族、学堂学科科目

はじめに

本研究は、主に清末期の山西における女子学校の創設過程及び、女子教育の実態を考察するものである。清末以前、中国では、男性を主要対象として立身出世の学問を教授することが一般的であった。それに対し、長い間「女子無才便是徳」という思想が根強く存在していたため、女性に向けた教育は、識字や『孝経』『列女伝』など基礎教養のレベルに留まっていた。

近代に入ると、中国における西洋文明の受容とともに、中国の女子教育も次第に開始されるようになった。アヘン戦争以降、各地に設立された教会は現地の民衆にキリスト教を布教するため教会学校を設立した。これにより、従来、教育を受ける機会のなかった女性にも、学習の場所が用意された。その後、教会ではなく、地方の郷紳により創設された女学も登場する。また、女子教育の学制上の合法的地位の確立と相俟って、山西地域の女子教育が初歩的な発展を遂げる。

こうした女子教育のブームは、当時中国で現れた女性解放の思潮と深く関係している。進歩的な知識人は男性と同様に、女子も教育を受ける権利があると主張し、女子教育の発展を呼び掛けていた。これは次第に沿海部から内陸へと波及し、山西商人の中では一部の「開明紳士」が積極的に呼応し、山西の女子学校教育の発展に努めるようになった。

この時期、山西地域の商人は女学を提唱し、女子学校を創設して新しい教育を受けさせることを奨励した。山西省で最も有名な女子小学は楡次常氏一族が創立した「知恥女子小学堂」である。この小学堂は「女子小学堂章程」が公布される以前に設立されており、近代山西女学の発展の始まりともいえよう。その活動は、近現代中国の教育史においても特筆されるものである。

現在、山西商人の文化・教育活動に言及した研究は少ないがその中で、許瑞鳳の「晋中商人家族与近代新式教育」[1] が特に留意される。許氏は、以下三つの方向から検討を行った。①楡次常氏、祈県渠氏・喬氏の新式学堂の設立事業とその影響、②山西商人出身者の海外留学及び教育活動、③山西地域における女子学校の状況、である。許氏の研究は山西商人が近代教育活動を展開する経緯及びその役割を検討し、従来の研究の空白を埋めるものである。しかし、許氏の研究は横断的、総合的な把握を重視しており、細部に関する考察は十分ではない。しかし、ここで提起された問題は、その後、多くの研究者の関心を惹きつけることになった。たとえば、趙高峰の「試析晋商参与地方教育的成因及途径選択――基与地方志的研究[2]」などが挙げられる。

こうした近代山西の教育史に対する総合的な研究がある一方、当時、影響力の最も大きかった常氏一族をピックアップして考察する研究も比較的に多く、趙輝・鄒怡「晋商家族文化考察

1）許瑞鳳「晋中商人家族与近代新式教育」（『山西社会主義学院学報』2009年）56頁。

2）趙高峰「試析晋商参与地方教育的成因及途径選択――基与地方志的研究」（『商丘商業技術学院学報』2010年）85頁。

与浅析 ── 以山西楡次車輞常氏家族為個例[3)]」などがある。これらの研究は常氏に関する新史料の発掘と分析に重点を置き、制度やカリキュラム、そして人員構成など学堂設立に関する基礎研究を行っている。

本稿では、先行研究を踏まえつつ、山西の各県志、教育史から新資料を発掘し、当該期の山西商人の代表である常氏一族の設立常氏知恥女子学堂の状況について考察し、その山西の近代教育に与えた影響を明らかにする。とりわけ、従来の研究で見逃されていた山西の近代女性教育の展開及びその背景を重点的に考察したい。

一、清末期における教会女学の登場

1．初期の教会女学

アヘン戦争以後、西洋諸国は不平等条約を通じて中国の門戸を強制的に開けさせ、沿海部及び交通の要所の港や都市で貿易拠点を置いた。いわゆる「通商口岸」の成立である。商業活動と同時に、西洋の文化もまたこうした都市から次第に内陸部へと広まり、近代教育制度の伝来もその一つの出来事であった。

当初は、少数の知識人にしか受容されなかったが、宣教師らの布教活動の拡大により、西洋の学問や教育理念は次第に一般民衆にも届くようになった。彼らは中国の民衆に「福音」を教えるため、キリスト教の書籍を翻訳し、新聞の発行や教会学校を創立するなど、様々な面で工夫を凝らした。この一連の活動は布教を目的としていたが、実質上、当時の中国社会での近代学問や教育の展開に基礎を提供していたのである。

この時期の教会学校の特徴は、主に三つある。まずは寧波、上海、福州、広州など沿海部に集中している点である。これは、天津条約と北京条約が締結されるまで、西洋諸国の宣教師に中国内陸部での布教活動が許されなかったためである。

中国最初の教会学校は、道光19年（1839）にマカオで開いた馬礼遜学堂であった。それに遅れて1844、寧波ではエルデゼによって中国最初の女子教会学校「寧波女塾」が作られた。以後、各「通商口岸」ではこうした教会女子学校が続々と登場し、熊月之の整理によると、咸豊10年（1860）までに全国の教会学校の数は38校に登った。そのうち16校が女子校であり、半数を占めていたとされる[4)]。

光緒２年（1876）になると、キリスト教会が営む教会学校は350校に増え、そのうち女子学校は82校あり、1307人の学生が在学していた。そのほか寄宿制学校も39校あり、791人の生徒がい

3）趙輝・鄒怡「晋商家族文化考察与浅析 ── 以山西楡次車輞常氏家族為個例」（『歴史教学問題』2003年）58頁。

4）熊月之『西学東漸与晩清社会』（中国人民大学出版社、2011年）226頁、227頁。

た[5]。さらに、江南地域におけるカトリック教会も女子学校を営んでおり、合わせて213校があり、2791人の生徒が在学していた[6]。

また陳景磐の調査によると、光緒３年（1877）以降、教会の女子学校はより正規化・世俗化し、生徒数も大幅に増えた。それまで教会女子学校の生徒は基本的に信者の子どものみであったが、この時期から、その対象を社会全般に拡大するようになった。そのため、光緒６年（1880）になると、教会学校は学生が溢れるという新しい局面を迎えた。光緒28年（1902）に至り、女子生徒数は倍以上となり、全体の43％を占めた[7]。

そのため、学校では授業料の徴収が開始され、手当も次第に廃止されるようになった。一部の「名門学校」は、高額の授業料を徴収しはじめ、入学対象も富裕層の子どもが中心となり、庶民にその門戸を閉ざした。たとえば当時、『中西教会報』にこのような広告が掲載されたことがある。

> 本書館専為培植周才，陶成間范，４歳以上女童皆可来学，書館教授華、英文学，中西書史及実用之学，兼接西国如紅黹、風琴等。学華英文者毎年学費20元，学針常加６元，風琴加10元，宿費40元[8]
>
> （本書館はすべての才能を育成し、情操を養う施設で、凡そ４歳以上の女児はみな入学が可能。書館では中国語、英語のほか、東西の書史及び中国語、の実用の学問を教授し、兼ねて西洋の刺繍やオルガンなども教える。英語を学ぶ人の授業料は毎年20元。手工芸はプラス６元、オルガンプラス10元。寮費は40元）

教会学校であるため、聖書の学習が重点的に行われていたが[9]、そのほかに英文、数学、さらに天文地理など近代自然科学の基礎科目も授業内容となっていた。一方、中国の伝統的な教育内容、たとえば、『三字経』『百家姓』ないし四書五経も教えられていた[10]。

このように、当時の教会学校は、もっぱら西洋近代学校をモデルとしていたが、その授業内容を見るとわかるように、中には、西洋近代科学のカリキュラムもあれば、中国伝統教育の古典的内容も放棄されていなかった。しかし、留意しなければならないのは、宗教経典の学習が教会学校の核心的内容である。また授業外時間でも、各種の教会活動を通じて宗教的精神の伝

5）陳景磐『中国近代教育史』（北京人民教育出版社、1980年）58頁。
6）杜学元『中国女子教育通史』（貴州教育出版社、1995年）268頁。
7）杜学元『中国女子教育通史』（貴州教育出版社、1995年）268頁。
8）『中西教会報』（1892年、第二期）
9）「最主要的中心科目的聖経，一切其他学科都是囲繞着這个中心来進行教学（聖書の学習が最も核心的な内容であり、他のすべての科目が聖書を中心に展開されていた）」（熊月之『西学東漸与晩清社会』中国人民大学出版社、2011年、228頁）。
10）陳景磐『中国近代教育史』（北京人民教育出版社、1980年）211頁。

授を行っていた。

総じていえば、この時期の教会の女子教育の特徴は、以下の三つにまとめられる。①女子小学校の規模が拡大し、生徒数も増加した。小学校のほか、女子中学校も次第に増えた。②教会学校は南から北へ、沿海地区から内陸地区へと発展を遂げた。③教育内容は宗教教育と英語教育を中心としたが、中国伝統教育の内容も取り入れられた。

2．教会女学が山西地域に伝わった過程

山西において教会学校が最初に登場したのは、光緒八年（1882）「丁戊奇荒」の時である。この年に起きた大飢饉を救済するため、ティモシー・リチャード[11]を始めとする宣教師は山西省に12万両の義援金を寄付した。これにより、救済を名目にキリスト教会がはじめて山西に入り、布教活動を行うことが許された。そして、この救援活動の中で、山西では、初めの教会女学が誕生した。これ以降、山西各地で教会が運営する学校や施設が数多く現れるようになったのである。まず、これらの教会女子学校では新教各派の学校が圧倒的に多くを占めたのに対し、カトリック教会の学校は非常に少なかった。これは両者の布教方針の違いによるものである。カトリック教会は教徒の拡大に重点を置き、文化教育事業の展開によって信徒を増やす方法は効果が緩いと考え、教会学校の設立については消極的な態度であった。一方、新教各派は、カトリック派とは対照的に、教会学校の設立に力を入れていた[12]。

また当時、山西の教会女学はおおむね晋中、晋南、および汾河両岸の県に集中していた。これは救済のために山西に来た宣教師らのルートとはほぼ一致している。また、このルートは比較的な平坦な地勢で、交通も比較的便利であるため、古くから経済、文教が比較的発達した地域でもあった。これもキリスト教の伝播や外部との連絡に有利条件を提供していたのである[13]。

こうした教会学校は、布教を主要目的としているため、宗教的な性格が非常に強かった。一方、当時まだ外部との接触が少ない山西のような内陸地域に、近代教育の精神や制度をもたらしたということも見逃してはならない。とりわけ、教会女学の出現は、山西の人々に、教育改革や女子教育の必要性を認識させ、後の山西商人の私立女子学校の創設に基礎や経験を提供したともいえよう。

11）ティモシー・リチャード（Timothy Richard 1845-1919）はイギリスの宣教師、中国名は李提摩太、字は菩岳。ウェールズに生まれ、英国バプティスト伝道協会に属した。

12）岳謙厚・黄欣「新教与山西近代教育」（『教育理論与実践』2007年）12頁。

13）岳謙厚・黄欣「新教与山西近代教育」（『教育理論与実践』2007年）12頁。

二、山西の女学思潮の出現と常氏知恥女子学堂の提唱

1．女性教育提唱の思潮

『礼記』内則篇では、前近代の中国社会の倫理・秩序を規定する内容がある。

> 子能食食、教以右手。能言、男唯女俞、男鞶革、女量絲。六年、教之数与方名。七年、男女不同席、不共食。八年、出入門窓及即席飲食、必后長者，始教之讓。九年、教之数日。女子十年不出、姆教婉娩听从、執麻枲、治絲繭、識紝組紃、学女事、以共衣服。観于祭祀、納酒漿籩豆菹醢、礼相助奠、十有五年而笄二十而嫁。有故，二十三年而嫁。聘則為妻、奔則為妾。凡女拜，尚右手[14]。

こうした儒教的倫理・秩序は、男女の別を明確に規定するもので、外で働く男性に対し、女性の活動空間は家の中に制限されていた。こうして長い間、中国伝統社会では「男尊女卑」「女子無才便徳」の観念が根強く存在した。そのため女性の教育は軽視されており、教育の対象から外されたこともよくあった。

西学の伝来により、進歩的知識人らは新たな社会秩序を要求し、女性の解放もその一環であった。とはいえ、新思想の誕生と展開は、必然的に伝統的価値観を打破しなければならない。そのため、その過程も長く、かつ困難に満ちていたのである。アヘン戦争の失敗後、中国知識人の優越感が残酷な現実に打破されて、変革維新の思想も次第に現れたが、旧社会の秩序観、特に女性に対する保守的な思想は依然として根深く残っていた。

一方、教会が運営する女子学校の出現は、一部の進歩的思想を持つ知識人に大きな衝撃をもたらし、彼らを中心に、女性教育の必要性を積極的に提唱し、その創設に積極的に携わる人も増えていった。その中では、康有為や梁啓超、経元善など「維新派」の知識人が特に女性教育の必要性を主張していた。たとえば、「変法維新乃女子教育的導線、有変法維新才有效法異国、才改科挙、設学堂、由設男子学堂才提到女子教育、更進而開設女子学堂」[15] と、女性教育の設立が維新内容の一つであったという。実際、康有為は「人類自立計、女不可不学」[16] と、それを人の自立にかかわることと指摘している。

梁啓超は維新派の中でも、特に女性教育を重視した人物である。彼は『論女学』という文章では、「天下積弱之本、則必自婦人不学始」[17] と、女子教育問題が国家の興亡に関係する重大な

14）張延成・董守志『礼記』（北京金盾出版社、2010年）278頁。
15）程謫凡『中国現代女子教育史』（上海中華書局、1936年）343頁。
16）康有為『婦女之苦総論』張錫深・周振甫の校点『大同書』（上海古籍出版社、1956年）133頁。
17）梁啓超『論女学』（中華書局、1936年）38頁。

事柄であると指摘していた。

康・梁のほか、経元善も女性教育の重要性を唱えた。「又上総署北南洋各督撫完挟単票」という文章で、彼は「我中国欲図自強、莫亟于広興学校、而学校本源之本源、尤莫亟于創興女学[18]」と、近代学校、特に女子学校の成立の重要性・緊迫性を訴えている。

これらを見ると、女性教育は国家や民族の自立に関わる重要な課題であることが、当時の進歩的な知識人に共有されていたことがわかる。

維新派知識人の文章や雑論が各新聞に掲載されることで、その近代教育・女子教育に関する議論も広く知られた。これにより女子教育を創設することも一時の潮流となり、光緒24年（1898）に、中国人によって設立された最初の女子学校、経正女学堂が上海で誕生した。

維新派の女子教育論は、やがて各地の開明紳士にも大きな影響を与えて、これを契機に地方での女子教育の設立や整備も加速するようになった。20世紀最初の10年間では、小学校から高等学校まで、数多く私立女子学校がこの流れの中で誕生し、内陸部の山西でも女子学校が作られたのである。

つまり、近代西洋女子教育の理論と観念の伝播は一部の進歩的中国人を伝統的な女性観、社会観から解放させた。こうした女性解放思想の広まりはまた、近代女子学校の興隆に繋がったともいえよう。

2．常氏知恥女子学堂の誕生

女学設立や維新思想の影響を受け、山西地域の商人は女子学を提唱し、女子学校を創設して新しい教育を受けさせることを奨励した。山西省における初期の最も有名な女子小学は楡次常氏一族が創立した「知恥女子小学堂」である。この小学堂は「女子小学堂章程」が公布される以前に既に成立し、近代山西女学の発展の始まりとなった。

清末の時代、西洋思想の渡来とともに女性教育の需要が次第にあらわれるようになった時代背景のもとで、常氏一族は率先して女性教育に注目し、女子学堂の設立を着手した。光緒31年（1905）、常氏一族の常麟書（1869-1927）、常賛春（1872-1941）は常氏の知識人を集結し、山西最初の女子学堂である知恥女子学堂を設立したのである。その後、学堂の活動は一度中断したが、民国11年（1922）に、常宝春、蔚春、詠春、十六世常乃慶などが女子校を再開し、教員を補充した[19]。また、三年後の民国14年（1925）には男子学堂と合併し、男女共学の学校が開設された。

女子小学堂設立当初はなお族内の女性の道徳教育を中心内容としており、「使族中女子通過読

18）経元善『又上総署北南洋各督撫完挟単票』、章開沅『経元善集』（華中師範大学出版社、1988年）213頁。
19）程光・梅生『儒商常家』（山西経済出版社、2004年）219頁。

書識字、以知失礼之恥和時節知恥」[20] という理念のもとで、「知恥学堂」と命名した[21]。また、女子学堂であるため、常氏の族人から徳望の高い女性を選んで学堂の諸事務を担当させており、十三代目常氏族人の配偶である范氏や孫氏などを学堂の舎監に任命したこともある。しかし、近くの教会学校の影響を受け、女子学堂の運営理念は、最初の「賢妻良母」を育てることから、新たな時代に適合する女性を育成することへと転換していった[22]。そのため、知恥女子学堂を卒業した学生の多くは家庭に留まらず、社会活動や教育活動に携わる新時代の女性となった。

『常氏家乗』によれば、授業の内容は、「文字、算術、修身為主、不拘定部章也」[23] となっている。豪商である常氏が運営する知恥学堂では、他とは異なり、商才を育成することを考慮し、早くも女性のための算数科を開設していたのである。また、『楡次県志』によれば、「（知恥学堂）功課初習家事及作文、習字、算術、漸乃選増科学」[24] とあり、その課程設置は最初は文字や家事のみであったが、その後、科学の授業も開いていた。これも学堂の運営理念に現れた変化を反映している。

学校開設の翌年から、入学希望者が増えて学校の規模も徐々に大きくなったため、甲、乙、丙、丁の４つの堂に分けて授業を行うようになった。当時の学生によると、「我的母親、姑母、大姐都在女学堂学上学，学堂有日本人（常鳳崗之妻）講義、初級班級教授女紅、女学堂也教算術、識字」[25] という。民国11年（1922）に民国政府が頒布した「壬戌学制」教育部は小学校課程に国語、算数、衛生、公民、歴史、地理、自然、園芸、工業、芸術、音楽、体育の設置を規定した。たとえば、

> 常氏知恥女子学堂課程設置有、算術、国語、常識（歴史、地理、生物）手工、図画、体育、歌。一個星期上六天課、上午語文、数学、三、四節是常識、下午是体育、唱歌、星期天休憩[26]。
>
> （常氏知恥女子学堂では、算術、国語、常識（歴史、地理、生物）、手工、図画、体育、歌などの科目が設置されている。一週間のうちの六日間は授業があり、午前中は国語、数学を、３・４限は常識を学び、午後から体育や歌の授業を行う。日曜日は休みである。）

20）程光・梅生『儒商常家』（山西経済出版社、2004年）53頁。
21）程光・梅生『儒商常家』（山西経済出版社、2004年）53頁。
22）程光・梅生『儒商常家』（山西経済出版社、2004年）53頁。
23）常賛春『常氏家乗』（振華出版社、2007年）10頁。
24）程光・梅生『儒商常家』（山西経済出版社、2004年）10頁。
25）「（原文）我的母親、姑母、大姐都在女学堂学上学、学堂有日本人（常鳳崗之妻）講義、初級班級教授女紅、女学堂也教算術、識字」程光『山西第一所私立新式――篤初学堂』（山西省政協文史資料委員会出版、文史月刊、2004年）９頁。
26）程光『山西第一所私立新式――篤初学堂』（山西省政協文史資料委員会出版　文史月刊〔太原〕2004年）12頁。

以上のように、常氏一族の女子は男子と共に先進的な教育を享受していたことがわかる。常氏一族が設立した近代的な新式学堂は、当時では評判が非常に高かった。教学管理の水準や授業の設置などの面では、当時の教育現場の最先端を走り、実験的な役割も果たしていたともいえよう。

実は、学校設立の二年後の光緒33年（1907）３月８日、清政府は『女子小学堂章程』の章程を頒布し、女子小学堂の建学趣旨、入学年齢、課程設置、修学年限、育成目標などについて規定した。光緒33年（1907）１月24日「学部奏定女子小学堂章程折」も頒布し、その規定は以下のような内容であった。

> 『学部奏定女子小学堂章程』女子小学堂以养成女子之德操与必須之知識、技能并留意使其身体発展為宗旨、分初等和高等两級。入学年齢初等小学７-10歳、高等小学11-14歳。初等小学主要設有修身、国文、算術、女紅、体操五个科目、高小除設此五科外這設有中国歴史、地理、格致、図画四个科目、此外初小、高小設音楽為随意科。初小和高小修業年限均為四年。女学堂的設立必須与男学堂分开[27]。
>
> 『学部奏定女子小学堂章程』女子小学堂は女子の徳操と必須の知識、技能を養成し、その身体の発展に留意することを旨とし、初等と高等の２級に分ける。入学年齢は初等学７～10歳、高等小学11～14歳。初等小学には修身、国文、算術、手芸、体操の５科目を設け、高等小学にはこの５科目のほか、中国歴史、地理、格致、図画の４科目を設ける。初等小学・高等小学ともに修業年限は４年である。女子学堂の設立は、男子学堂とは分離されなければならない。

『女子小学堂章程』では、女子小学堂の建学の趣旨、課程の設置、学堂の行政管理について、立学総義、学科程度、設備編成、教習管理の四つに分けて詳細に規定されている。「学科程度章」第四節には、「中国女德、歴代崇重、今教育女儿、首当注重于此、総期不悖中国懿嫩之礼教、不染未俗放縦之僻習」と、女子教育を重視する態度を規定している[28]。

この『女子小学堂章程』を見れば、清政府は伝統的な女性道徳論を、西学知識の伝授よりはるかに重視していたことがわかる。課程の詳細な設置において、『女子小学堂章程』は各学科の四年間の毎週の教授時間数を以下のように規定している。

１年生、２年生のカリキュラムをみると、手芸の授業は全課程の６分の１を占めるほど重要視されていた。また、３年生、４年生の場合は全体の５分の１を占めている。そのほか、国文のも重点的教授された。初等小学の授業の場合、国文学の授業全体の３分の１を占め、高等小学の課程設置では、その割合は更に大きかった。これらに対し、他の科目の比重は比較的小さ

27）劉秀生・楊雨青『中国清代教育史』（北京人民出版社〔北京〕1994年）138頁。
28）舒新城『中国近代教育史資料』（北京人民教育出版社、1961年）794頁。

かった。

政府のこうした学制が確立することで、女子学堂の存在はようやく公認を得た。こうして全国各地で公立や私立の女子学堂が続々と開設されていくわけだが、常氏学堂が学制の頒布以前に設立された近代女学校として、山西の教育史においては画期的な意義を有しているのである。

以上のように、常氏一族の女子は男子と同様、進歩的な近代教育を享受していた。この女子学堂は当時から評判が高かった。これは学生たちの回想からも窺える。たとえば、かつて常氏知恥女子学堂に通っていた常風岱という女性は「私の一生の文化的基盤は、常家女子学校で培われた」[29] と回想している。また、同学堂を卒業した女子学生の多くが教育事業に従事していたことは記録からも確認できる。たとえば、常風笄（1903-1997）は卒業後、太原第一女子師範学校で教育を受けた後、民国15年（1926）、斉魯大学教育科に入学し、卒業後は燕京大学研究院に進学した。その後、山西省に戻り、汾陽銘義中学で教鞭を執った。中日戦争勝利後には貝満女子中学（現北京市第一六六中学）さらにまた40年ほど教師として勤めた。常賛春の娘の常文彬、常士淑はそれぞれ、上海師範高等学校、楡次女子学校で学長を務めた。そのほか、張聘珍、常国慧など教育や芸術の分野で活躍する卒業生も多い。

民国11年（1922）、常氏知耻女子学堂は常氏篤初学堂との合併を経て男女共学となった篤初学校は、より自由進歩な学風となった。この時の教師については「家中的教師都是父親（常彦春）請回来的、当時父親国民師範、太原師範、太原女中教書、他的卒業生安排在篤初小学、而且工資比其他学堂的高」[30] と回想している。また、学校の運営も自主性を重んじていたことが留意される。

もともと山西の学校では教育部の作った教科書を使用していたが、軍閥閻錫山が山西の軍政を握った後、統治の正当性を主張するため新たな教科書を作り、省内学校での使用を指示した。しかし、その内容は軽薄で誤謬が多いので、常氏一族の学校では、こうした軍閥政府に指定されたものではなく、独自の教科書を使用することを貫いた。この点からも、常氏学堂は独立自主の精神を重んじることがわかる。

3．常氏知恥女子学堂の意義とその影響

既に述べたように、常氏知恥女子学堂が創設されるまで、山西には外国の教会が設立した女子学堂しかなかった。宣統３年（1911）に出版された『山西全省財政説明書』の統計によると、清末期、山西の女子学校八校あるが、その創立時期は、いずれも常氏知恥女子学堂より後であった。たとえば、常氏知恥女子学堂より一年遅れて開設された「隰県女子学堂」は光緒32年（1906）に県学政孟歩雲によって創られたものであり、渠本翹らが設立した「祁県県立女子二級小学堂」の開校は宣統元年（1909）であった。そのほか、著名な学者楊篤の妻が創った「郷寧

29）程光・梅生『儒商常家』（山西経済出版社、2004年）295頁。

30）常国慧『篤初上学快楽的童年』（山西省政協文史資料委員会出版、文史月刊、2003年）10頁。

女子学堂」や太谷の豪商喬穆卿らが創った女子小学堂も常氏の女子学校より数年遅れていた。

また、常氏知恥女子学堂は情勢の変化に応じ、常に進化している点も留意される。民国初年（1912）「女権革命」と「女学振興」を主張した南京国民政府は初等小学堂を彼氏と共学できるようにした。

これにより、「常氏知恥女子学堂」は、民国14年（1925）に「常氏篤初小学校」と合併し、男女共学の学校となった。また、従来常氏一族の子弟に限定していた「家学」という性格を脱するために、外部の子弟も学生として受け入れ始めた。

このほか、教師陣の拡大や更新も進み、常氏一族の知識人のほか、太原の第一師範や国民師範などの卒業生の中から、進歩的な思想を有する若手を教員として招聘していた。授業の内容も、体育、美術、音楽、作文などの科目を増設し、図書館や閲覧室などの学習施設を設置も行った。

以上種々の改革は、山西全省の学界での変革を推進する模範的な役割を果したといえる。こうして山西各地でも女子初等小学堂や女子高等小学校が設立され、また女子師範学校も四校まで創られた。その背後には、常氏知恥女学堂が果した役割が大きいといえよう。

前述したように、常氏知恥女学堂が登場する前まで、山西、とりわけその農村部では保守思想が根強く存在し、女性は「三従四徳」という旧社会のルールを従わざるを得ず、日常活動や思想の自由も大きく制限されていた。常氏知恥女子学堂の創立を契機に、女性も教育を受けることが可能になったのである。これにより、保守的な思想やルールの束縛から脱する人も次第に多くなり、社会の気風もより開放的となった。これに関して、劉大鵬の『退想斎日記』[31] は当時の様相を以下のように記録している。

> 楡次車輞村去冬設立一所女子学堂、女学生不一、有女、有婦、凡十余人、年皆十七八歳、教習為某孝廉、某生員、皆未三十歳、所教皆効人洋之法、衣服亦効洋人装飾、人多羨慕其所為、而不以為非[32]。

この日記の記録から、少なくとも二つのことがわかる。一つは、「所教皆効洋人之法、衣服亦効洋人装飾」というように、常氏知恥女子学堂では授業内容から服装まで、みな西洋の方式にならっていた。もう一つは、「人多羨慕其所為、而不以為非」からわかるように、常氏一族の女子学堂とそこで行われた教育活動は当時の人々から歓迎されていた。

31）『退想斎日記』（劉大鵬著・喬志強標注、山西人民出版社、1990年）は清末知識人劉大鵬が1890年（光緒16年）から1942年（民国31年）までの51年間の生活及び当時の社会状況を記録したものである。本日記はアヘンの吸飲、汚職官吏や苛酷な税金による庶民の圧迫など清末期の山西省の都市・農村の世相、そして社会の変動を知るための貴重な史料である。

32）劉大鵬著・喬志強標注『退想斎日記』（山西人民出版社、1990年）145頁。

劉大鵬の『退想斎日記』には「常氏知恥女子学堂、充教習者為男子、此風一開、則男女有別之道不講矣」[33] とあり、男子が教職を担当する気風を開くと、おのずと「男女別あり」の旧習がなくなったという。

上記の一覧表及び劉大鵬の『退想斎日記』の記録からもわかるように、常氏一族は女子教育に熱心に取り込んでいた。また当時常氏一族の文化水準が既に高いところに到達していたこともうかがえる。

民国期になると、女子が学堂に通うことがより多くなった。山西の各県では女子学堂があるほか、他の学堂でも男女共学がとり入れられるようになった。『山西通志・教育志』によれば、山西省の小学生の入学率、女子の入学率は民国９年（1919）の時点でともに全国第１位であり、全国で最も基礎教育が普及した省の一つであった[34]。また、1935年の学生在籍のデータ[35] によると、当時の学生のうち、全体の19.2％が女子であった。

こうした山西における女子教育の飛躍的発展の背後には、常氏一族を代表とする山西商人の積極的な働きが無視できない要因の一つのであろう。

４．祁県女子小学堂

常氏一族では最初に女子学堂を創設して以来、山西ではその後多くの女子学堂が創設された。常氏一族単独で運営していた知恥女子学堂とは異なり、祁県女子小学堂は祁県の商人が連合して設立したものである。宣統元年（1909）、祁県紳士の孟歩雲の提案により、祁県の渠氏、喬氏、何氏ら豪商の家が祁県女子小学堂を設立し、学校の運営にも参加した。民国８年（1919）祁県県立女子二級小学と改称される。ただし民国26年（1937）に日本戦争が勃発し、祁県が陥落することにより、この女子二級小学も廃止された。

祁県女子小学堂は前後25個の小組、18個の高小組を募集し、初小学制４年、高小学制３年を併設した。普通教育のほか、規模の小さい師範教育と職業教育を行っている。その興隆期には祁県のみならず、近隣の太谷、平遥地区などの女子も入学していた。この時期に開設された女子学堂は、最初では「賢妻良母」を育つことを目的としたところが多く、その校歌や校訓などにも反映されている。たとえば、祈県女子小学堂の校歌には、

> 我唱餘山川清拔地勢自古称、風俗質朴人民勤倹閨秀優中灵、這世念世紀家教育重、賢母賢妻待养成、女子責非軽[36]。

33）劉大鵬著・喬志強標注『退想斎日記』（山西人民出版社、1990年）154頁。

34）山西省地方志編委会『山西通志・教育志』（中華書局、1995年）97頁。

35）寧祥根・陳英・李慶発『晋中教育志』（山西教育出版社、1992年）７頁。

36）梁建紅・王蘭仙「祁県文史資料――祁県県立女子両級小学校（1909-1937）」（第八輯、祁県政協文史資料委員会、1991年）84頁。

とあり、女性の責任を「賢母賢妻」になることとする。しかし、民国期における民主革命の思想の普及により、新たな時代に適合する女性を育成することを目指すようになった。これにより、祈県女子小学校の様子も一新する。校長の孟歩雲がみずから作成した校訓「自覚、自愛、自訓」及び、改正された校歌からもこの変化が窺える。

二十世紀女権高漲、我們要自覚起来与男子争平等、同受教育、同操職業、政治同過問。自覚、自覚、自覚、自覚起来与男子争平等[37]。
（二十世紀では女権が高まり、私たちはそれを自覚して男子との平等な地位を争おう。同じく教育を受け、同じく仕事をし、同じく政治に参与しよう。自覚、自覚、自覚、自覚して男子との平等（な地位）を争おう）

この校歌は、女性の権利、男女の平等などの主張が打ち出されている。

このように、教育の発展に伴って女性の思想にも大きな変化が見られる。男子と同様の教育を受けることが強く要求されるようになったのである。

祁県女子小学堂の課程設置は「初級クラスは国語、算術、政治、歴史、地理、図画、手工」[38]で、授業の余暇は生活、活動も多彩になってきた。校長の孟歩云は「天足会」を設立し「把全校学生按住地分為若干組、毎个組選有査足委員，然后分片上街宣伝入戸検査」[39]といっている。

祁県女子小学堂の女子学生と教師は天足、すなわち纏足をしない素足であり、商人が女性を解放する決心も体現している。清末期の山西における女学の発展は、このようにすでに先進的なものであったことがわかる。

おわりに

本稿では、山西地区の女子学堂について、常氏知耻女子学堂を中心に考察を行った。この考察を通じ、教会学校が中国に伝わったことを契機に、中国近代の女子教育が開始されたことが確認できた。その後、女性解放思想の普及により、女子学校設立の風潮はやがて山西全域に波及し、内陸部で比較的早く女子教育の環境を整えた地域となった。また、新式学堂の卒業生も積極的に女子教育事業にとりくみ、農村部までに入り込むなど、女子が教育を受ける重要性を広く宣伝し、より多くの女子を学校に集めた。

また、山西の女子教育の発展の過程で山西商人がより女子教育を積極的に呼びかけ、その発

37）劉大鵬著・喬志強標注『退想斎日記』（山西人民出版社、1990年）147頁。
38）喬晋芳「祁県文史資料――祁県県立女子小学堂」（第八輯、祁県政協文史資料委員会、1991年）148頁。
39）梁建紅、王蘭仙「祁県文史資料――祁県県立女子両級小学校（1909-1937）」（第八輯、祁県政協文史資料委員会、1991年）83頁。

展に大きく貢献したことも知られた。これは山西の商人の文教重視の精神とも深く関係している。もともと族内女性の教養を重視する伝統があるため、彼らは近代以来の新式教育発展の潮流の中で、比較的早くから女性教育の重要性を認識することができたようである。これのことが山西最初の女子学堂の設立にも繋がったのである。つまり、こうした近代教育、とりわけ女子教育に対する高い関心も、代々伝わってきた山西商人の文化・教育の理念に通ずるものであり、山西の近代教育の特色にもなったことになる。また、山西の新式学堂の教育理念は当時にあってはかなり先進的であり、また当時の山西地域の教育水準を高め、また女性地位を上昇させることにも貢献した。清末民国期の山西地域における教育の近代化の飛躍的な発展を遂げたのは山西商人の努力が大きな影響を及ぼしているのである。